

「私の後悔、そして願い」

坂井市立三国中学校 3年 向野 一愛 (むこうの ひとえ)

みなさんは、なくし物をしたとき、どうしてほしいですか。放っておいてほしいですか。それとも一緒に探してほしいですか。私は間違いなく後者です。そんなこと、考えなくても即答できることなのに、あの日の私は、その答えにふたをし、知らない顔をしたのです。

今年の冬の終わり、私は友達八人とレジャー施設へ遊びに行きました。そこはお金を払ったレシートを見せれば、出入り自由な場所でした。午前中は息が切れるほど走ったり、大声で笑い合ったり、とても楽しい時を過ごしました。お昼になり、ご飯を食べるため外へ出ようと、レシートを見せ次々とゲートをくぐりました。すると一人の友達が、

「ごめん、レシートなくしてもた。先行ってて、私トイレやら色々探してみるで。」

そう言って今通ってきた道に戻って行きました。私たちがご飯を食べていると、ラインがきました。

「ごめん。探したけどなくて、私お腹すいてないから、ここで待ってるね。」

私たちは食べ終わり、戻ってまた夕方まで遊び解散しました。帰りの車の中、黙っている私に、母は言いました。

「どした。楽しくなかった。何かあったの。」

「何でもないよ。楽しかったよ。」

私は何度もそう言おうと笑顔だけは作っているのに声にならず、気付くと私の手の甲にはボタボタと大粒の水滴が流れ落ちていました。

「なぜあの時、一緒に探そうと一歩踏み出せなかったんだろう。みんながわいわい楽しんでいる場所で、彼女は一人ぼっちで、どんなに不安で悲して、淋しかっただろう。」

私の心は、彼女に背を向けたあの瞬間から、ずっとずっとチクチクと痛みを発していたのに、私はその痛みにもふたをして、気付かないふりをしたのです。

「自分がしてもらってうれしいことを、お友達にもしてあげてね。」

母は、私が小さい頃から今も、そしてあの日も、呪文のように毎朝そう言って、私を送り出してくれました。今まで私は、その言葉をうるさいなあぐらいにしか聞いていませんでした。でもあの日、全てを私から聞いた母は私の手を握り、一緒に肩を震わせ泣いてくれました。その時なぜだか、ズキズキ痛くて仕方なかった私の心の中が、ほんの少しですが、ふわっと温かくなった気がしました。母がずっと言っていたのは、こういうことだったのかもしれないと、感じる事が出来ました。

「自分がしてもらいたいと思うことをするね。」

今までは母から私への一方通行だった言葉が、あの日以来、私と母の合言葉になりました。

今、私には大好きな曲があります。

「人が痛みを感じたときには、自分のことのように思えるように…」

という歌詞が、毎日口ずさむくらい大好きです。強くて、優しさがあふれている歌詞です。そして、母が私に教えてくれたことです。

あの経験を経て、最初は彼女への後悔ばかりだったけれど、少し時間が経った今私は、私と母の合言葉を、私の大好きな友達や先生方、町の人、そして世界中の人々に知ってもらいたいと思うようになりました。世界中の人々が、自分がされてうれしいことだけを、相手に言ったりしたりするようになれば、心ない誹謗中傷やいじめ、差別、ひいては戦争も「なくなる」ではなく「できない」になると、私は確信します。あの日、

「私なら一緒に探してほしい。一緒に探そう。」

私の心はそう叫んでいたのに、彼女の笑顔が不安で一杯だったと気付いていたのに、私は逃げてしまいました。その後悔を一生忘れず、私は強く生きていきます。今度は絶対に、大好きな人を守りたいから。そしてもう一つ、私と母の合言葉が、今日出会ったみなさんから、みなさんの大切な人へと伝わり、世界中の合言葉になってくれることを、私は願います。